須川展也 ヤマハサクソフォンを高みへと導いた世界的スタープレイヤー

今やアルトサクソフォンの最高峰として、誰もがいつかは手にしたいと 憧れる銘器となったヤマハのカスタムモデルYAS-875EX。

その誕生から今年は20年の節目となる。そこで今回はYAS-875EXが国内外でジャンルを問わずトップ・プレイヤーに愛されるに至った理由を探っていく。まずは本邦サクソフォン界のシンボルとも呼べる世界的プレイヤー須川展也氏に話を訳こう。長年、須川氏とタッグを組み開発に携わってきたヤマハ株式会社B&O事業部 B&O開発部 管教育楽器開発グループ主幹の内海靖久さんにも同席してもらった。

(文:中野 明/写真:土居政則/協力:ヤマハ株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパン)



ヤマハ株式会社B&O事業部 B&O開発部 管教育楽器開発グループ主幹の内海靖久 (写直右) と

先入観なしで判断することの重要性に気づいたブラインド試奏会

―― 初めてのご自分の楽器は高校入学時に手に入れたヤマハYAS-61と のことですが、そのサクソフォンについての思い出を聞かせてください。

須川展也 高校受験の時に父から浜松北高校に合格できたら楽器を買ってあげると言われていて、入学した後ある日突然、父が買って帰って来たんです。多分デパートの楽器売場とかで「ヤマハの一番良いサックスを」と言って買ったのかな(笑)。それが YAS-61でした。もちろん嬉しくて、宝物ですよね。自転車の後ろの荷台にくくり付けてどこにでも持って行きましたね。今から考えると酷い取り扱い方ですけど(笑)。高校2年で東京藝術大学を受ける決心をして、レッスンを受け始めた大室勇一先生のすすめでセルマーに替えるまで使いました。

— 1988年に発売されたカスタムYAS-875/855の開発には、当時ヤマハで設計を担当されていた平舘さんを通じて初期から携わられていたそうですね。

須川 藝大3年で日本音楽コンクールで最高位になった後、平舘さんに 声をかけていただいて動き始めていたカスタムの開発をお手伝いすることになりました。まだセルマーを吹いていた頃ですが、僕はヤマハ所縁の 浜松市の出身ですし、実は平舘さんには高校生の頃からお世話になって いたので、喜んでと。

印象的だったのは、カスタム発売の直前の頃に、浜松市内のホールを借りてブラインド試奏会をしたことです。ジャン=イヴ・フルモーさんと僕の二人が代わる代わるに他社の楽器も含めステージ上で何本も吹いて、客席の一番後ろでヤマハのスタッフの方々と聴いて(楽器は見ずに)音だけで評価するという。僕がジャン=イヴの音を聴いて「これが一番良い音



だなあ、セルマーに違いない(笑)」と二重丸を付けた楽器が、実は875だったんです。先入観なしで聞いたら、ヤマハが一番良かった。逆にジャン=イヴも僕の吹いたヤマハに二重丸を付けていました。

先入観なしで判断するというのはとても大切です。いまも試奏する際には自分ではなくこの楽器を将来きっと吹くであろう大勢の人たちのために、できるかぎり公平で客観的に判断したいと常に思っています。

どの方向にも行ける柔軟性を持っている アンテナを立てられる楽器

―― YAS-875EXの開発がスタートした経緯は何だったのでしょう。どこにこだわって、何を変えた、あるいは変えなかったのですか。

須川 かつてのヤマハは『音が軽い』ということを各方面から言われていて、僕はそれも先入観なんじゃないの、とも思いますけど、それで初代カスタムはとても重厚で豊かな音が出る楽器として作られたのですが、少し僕には重すぎの面もありました。なので、僕は本体以外の部品を替えたり、ネジを外したり自分でカスタマイズして吹いていたんですが、そういった点を落とし込んだポジションも小さめな楽器を試作してみたらとても評判が良かった(YAS-875SPとして限定発売)。それがEXの原点です。



管のテーパーなど、基本設計は同じです。

— 金メッキのYAS-875EXGを使われていましたね。

須川 金メッキのほうが、音にエッジが立って主張が出るように感じます。 パワーも出ますね。

内海さんはいつからサクソフォンの開発を担当されているのですか。 内海靖久 私は2003年の入社で、YAS-875EXの最初の発売(2002年) のすぐ後です。開発に携わったのは第二世代のYAS-875EXからです。

— 2015年にモデルチェンジされた、第二世代のYAS-875EXの開発は 何を意図してスタートしたのですか。

須川 スタートというより、最初のYAS-875EXが出て間もない頃から引 き続いて改良を進めた、という感じでしたね。

内海 基本設計は変えないまま、ポジションがより自然なレイアウトにし たこと、特定の音で出やすいウルフトーンを抑えること。具体的には音孔 の大きさを変えています。あとは低音D、E、中音C#のオクターブの音程 も再考しました。焼鈍の仕方なども変えました。

第二世代のYAS-875EXの吹奏感や音色について他楽器とのブレ ンドなども含めて特徴を挙げるとすると?

内海 須川先生は中音域の音色にもこだわっていらして、ヤマハの楽器 はその点は他社とは一味違うぞ、と自負しています。

須川 この音色は何というか『自分自身そのもの』ですね。一言でいえば 『柔軟性』。ナチュラルということ。音のブレンドですが、どれくらいブレン ドさせるか、あるいは主張するかは常に曲が求めるものにアンテナを立 てます。アンテナを立てられる楽器ということは、どちらにも行ける柔軟 性があるんです。

また音色については、長年吹いてきて実感することがありまして、良い 音だなあと思って吹くと良い音がして、それが聴き手に伝わる、という真 理があると思います。

— カスタム用ネック(G1、V1、E1、C1)の開発にも携わられたのですね。

須川 はい。E1、C1はどちらかというとジャズ向きで、僕はV1を使ってい ます。高音域の音程がよりしっくり来たことと、ヨーロッパ向けと言われる V1を知っておいたほうがいいかな、と思いました。

内海 C1は細管、E1はミドルサイズです。G1とV1は内径が同じ太管で、 ボアの形状が異なります。

最終的にはジャンルを問わずあらゆる人の インスピレーションを刺激したい

現在ご使用の、赤い塗装の楽器についてお話しくださいますか。

須川 昨年の7月25日に還暦を迎えたのですが、藝大等で昔教えた生 徒たちがお金を出し合ってプレゼントしてくれました。誕生日の夜に、予 告なしに福井健太君と國末貞仁君が我が家を訪れて、持ってきてくれた んです。びっくりしましたし、嬉しかったですね。

内海 それ以前から、福井さんを中心に した皆さんから赤い楽器を一本特注で 作ってほしいということでシークレットに 話が進んでいました。 当初は YAS-280 で、ということだったのですが、それだ と実際に本番で使ってはいただけない 記念品的なものに終わってしまうので、 YAS-875EXでやらせてもらえないかと 提案しました。結果的にこんなにたくさ んの本番で使っていただけて私も本当 に感謝しています。

須川 よい生徒に恵まれた幸せを噛みし めながら演奏しています。その『幸せ』が 音に乗るんです。さっき申し上げた、自分 が本当にいいと思って吹くからいい音が するという、それですね。

本当にそうですね。さて、発売から20 年を経て、国内外で多くのプレイヤーが YAS-875EXを愛用するようになりました が、開発当初は現在の状況を予測してい ましたか?

須川 ヤマハは良い音がするなあ、これが

世界に認められてほしいなあ、と初代カス

タムの頃から思いながら吹いていましたね。感慨深いです。

内海 先人たちが築き上げ、そして今の我々開発陣が引き継いで作り上げ たヤマハのこだわりを、須川先生はじめトッププレイヤーの皆様が認めて 使い続けてくれた。その演奏を今の若手トップ奏者をはじめ多くの方たち が聞いてヤマハの良さを知ってくれた、ということだと思っています。

YAS-875EXはジャンルを超えた表現ができる楽器だと思いますが、今 後どんな分野、どんな奏者に使っていってほしいと考えますか。

須川 ジャンル、というよりは、人ですね。YAS-875EXはクラシック向き で、同じヤマハのYAS-82Zはジャズ向きと言いますが、そもそもクラシッ クって何なのか、ジャズと言ってもいろいろあるでしょ、という話です。最 終的にはジャンルを問わずあらゆる人のインスピレーションを刺激した い。楽器を吹く楽しさそのもの、マニアックな楽しさや、一緒に吹いて何か をする楽しさ、そんな楽しみ方そのものを一緒に考えて追求して行きたい ですね。



須川氏の還暦のお祝いに教え子たち から贈られた真っ赤なラッカー仕上 げのYAS-875EX

上野耕平〉住谷美帆

華のあるキャラクターで愛される若手実力者対談

サクソフォン奏者として常に先頭に立ち、自らサクソフォンの未来を切り 開き牽引する須川展也氏に続いて登場するのは、進境著しい若手二人。 次世代を担う男女のエースである上野耕平氏と住谷美帆さんもYAS-875EXを頼りになる相棒だと語る。

(文:中野 明/写真:土居政則/協力:ヤマハ株式会社、株式会社ヤマハミュージック ジャパン)





Kohei Ueno

Miho Sumiya

同郷で藝大の先輩・後輩で師匠二人も同じという稀有な間柄

お二人は同郷 (茨城県)で東京藝術大学の先輩・後輩という間柄で すが、いつ頃からのお知り合いですか。

住谷 初めてお会いしたのは私が高校2年の時で……。

上野 僕が大学2年。

住谷 3つ違いなんです。鶴飼奈民先生 (ヴィーヴ! サクソフォン・クヮル テット他)のおさらい会で初めてご一緒しました。

上野 鶴飼先生からは、住谷というすごい高校生の子がいるから是非会 わせたいと聞いていました。そう、鶴飼先生から須川先生と、習った先生 も一緒なんですよ。

住谷 私はそれより前、高校1年の終わりに近隣の高校の演奏会で上野 さんがソロを吹かれたのを聴いているんです。プロのサックスの演奏を 生で聴いた初めての経験でした。もう、何じゃこりゃあ、という感じで、そ れまで狭い世界にいた自分が初めて、ああいう世界に行きたい、と心の 底から思ったきっかけでした。









上野耕平が愛用するYAS-875EX

住谷美帆が愛用するYAS-875EX

師である須川氏を通じて初めて出会った875EXに感じた衝撃

---- お二人の、現在に至る使用楽器の遍歴を教えてください。

上野 小2で吹奏楽を始めて(「早い!」という声)、小3でヤナギサワのエントリーモデルを買ってもらいましたが、中1で参加したキロロのサックスキャンプで初めて須川先生に習った際に、先生の楽器(YAS-875EXG)を吹かせていただいてびっくりして、買い替える機会があった時にYAS-875EXに替えて芸大1年まで吹きました。その後YAS-875EXGに替え、2019年の10月に第二世代のYAS-875EXGを買って今も使っています。ソプラノは中1からセルマーのシリーズⅢでしたが、大学1年でそれを売ってYSS-875EXを手に入れ、2015年4月にYSS-875EXGに替えました。

住谷 最初はヤマハYAS-23やビュッフェ・クランポンのS1、セルマーSA80など借り物や備品をいろいろ吹きましたが、中2でセルマーのシリーズⅢを買ってもらい、それをずっと吹いていました。ですが藝大1年の時に、その楽器を地面に落としてしまい入院させなければならなくなり、須川先生の部屋に置いてあったサブのYAS-875EXGをお借りして吹いた時に、これだ!と思ったんですね。それ以来、この楽器をとても気に入って吹いています。

―― お二人とも、ヤマハの875EXGを吹いて驚かれたことが転機になっているんですね。何がそれまで吹いていた楽器と違ったのでしょう。

上野 人間味と暖かさ、ですね。今でも覚えています。中音域のド、シ、ラ辺りの、サックスで一番鳴らしづらい音の豊かさと丸い音がとにかく凄かった。

住谷 私も中音域ですね。私はそれまでソロコンの講評などで、上と下はきれいだけど中音域が……みたいなことをずーっと言われ続けていたのですが、いきなり自分の理想の音が出てしまったようでした。音程も何も小細工が要らないし、今までの苦労は何だったの、という感じでしたね。

---- EXではなく、金メッキの EXG を選択した理由は何ですか。

上野 表現力の豊かさ、ですね。金メッキはパワーが出る、と思われがちなんですが、それだけではなくて、弱音も含め全方向への音の通り方が全然違うんです。特にソプラノには、低い倍音が豊かに鳴るという、ヴィンテージ楽器に通じる稀有な美点があります。

住谷 そう、広いコンサートホールでの音の通り方がまるで違いますね。 ピアノともよく溶け合います。

一上野さんはYAS-875EXGの、第一世代と2015年モデルチェンジの第二世代の両方を吹かれてきたかと思いますが、何が変わりましたか。 上野 より人間と音楽との距離が縮まった、という一言です。一筆書きで音楽をするように、余計な気を遣わずに音楽表現に没頭できます。正直、第一世代は低音域に少し難しさがありましたが、そこが劇的に改善されました。僕は古楽器を吹くことがあるんですが、そういうテイストすら備えています。

これ1本でどの時代にも行ける! 上手くなるを超えたレベルに連れて行ってくれる!!

―― YAS-875EXGという楽器が、自分の欠かせない相棒だと感じる理由や、そういうエピソードがあったら教えてください。またこの楽器によってご自分の新しい表現や新しいテクニックが引き出された、と感じたことはありますか。

上野 これ1本あればどの時代にも行ける、というところですね。バッハもクラシックも現代も、様々なスタイルを吹き手のさじ加減一つで1本の楽器で、しかも奥深く表現できること。それを実感しています。

住谷 ヤマハに替えた際の決定的なきっかけが、オーケストラスタディでした。オーケストラの中で吹くのって、いわゆるサックス的な曲とは全く違うコントロールが要求されますが、ヤマハはそれに全部応えてくれるんで

す。ただ上手くなる、というレベルを超えた『その上』に連れて行ってくれる楽器だ、と直感しました。その時初めて、私は一生サックスを吹いていきたいと強く思いました。

上野 オーケストラと言えば、コンチェルトを吹いてその後すぐオケの中に入って吹く、みたいな本番がよくあるんですが、リードを替えずにいけます。そこまでコントロールできるんです。

―― お二人は、ぱんだウインドオーケストラでは一緒に演奏されていますが、お互いの演奏についてどう思っていますか。

上野 僕に合わせるのに苦労してるだろうな、と思います。毎回吹き方が違うらしいです(笑)。

住谷 それだけ違うアイディアがあるのは凄いんですが、ホントに違うんです。多重人格みたいに。

上野 決して適当にやってるわけじゃないんですが(笑)、違うからこそ面白いと思っています。コンマスはいろいろな人に信号を発したり、時には指揮者をけしかけたり、自分のパートまでなかなか目配りできないんですが、住谷さんはよくフォローしてくれています。それにしても住谷さんはこの2~3年で化けるように成長しましたよ。隣で感心しています。

住谷 上野さんもどんどん音が良くなっているのが分かります。別の自分になることを怖がらない。昔とは別人のようになって、世の中のほうがむしろそれを追いかけているようなところもあります。

世界に出たい! 聴く人の耳をもっと広い世界に開かせたい!!

---- 今後、この楽器とともにどんなことにチャレンジしていきたいですか。

上野 世界に出たい! もっと海外での活動を増やしたいですね。そして、変な言い方ですがアンチがもっと増えてほしいですね。有り難いことにお誉めの言葉はたくさんいただくんですが、否定的な意見をもらうことが滅多にないんです。もっと賛否を呼ぶようなセンセーショナルな演奏をしたい。そのためには自分というものをもっと鋭利に出していっていいのかなと。

住谷 サックスという楽器はヴィブラートをかけて良い音で奏でれば、それだけで満足させてしまうところがあって、ある意味有り難いんですが、聴く人の耳をもっと広い世界に連れて行きたいんです。そのためにも楽器というものを超えた表現をしたい。他の楽器のプレイヤーにはそれができる方がいますよね。

最後に、まだ吹いたことのない人に YAS-875EX のおすすめポイントを教えてください。また、どんな人や奏者に使ってほしいと考えますか。

上野 最も重要なポイントは、演奏する人の身体の一部になってくれる楽器だということですね。そして工業製品でありながら人間味がある。だから楽器ではなくて演奏者自身の個性が表れるんだと思います。そして何よりも、お求め安い! 今の時代、世界の最高級品がこの値段というのは他に無いですから。

住谷 音程が良くてコントロールしやすく、変な替え指も要らないから、 上達が早いんじゃないでしょうか。大人になって、何年も触っていなかった楽器を再び始めよう、という人にも試してみてほしいですね。きっとびっくりすると思いますよ。

PROFILE:上野耕平

茨城県東海村出身。8歳から吹奏楽部でサックスを始め、東京藝術大学器楽科を卒業。これまでに須川展也、鶴飼奈民、原博巳の各氏に師事。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。2014年には第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。CDデビューは2014年「アドルフに告ぐ」、2015年にはコンサートマスターを務める<ばんだウインドオーケストランのCDをリリース。2016年4月からは昭和音楽大学の非常勤講師として後進の指導にもあたっている。< The Rev Saxophone Quartet>ソブラノサクソフォン奏者、<ばんだウインドオーケストラ>コンサートマスター。

PROFILE: 住谷美帆

茨城県水戸市生まれ。5歳からピアノを習い12歳からサクソフォンを始める。2018年東京藝術大学を首席で卒業。卒業時にアカンサス音楽質、安宅賞受賞。これまでに須川展也、鶴銅奈民、大石将紀、有村純親の各氏に節事。第22回日本クラシック音楽コンクール全国大会サクソフォン部門第1位ほか受賞多数。2018年7月スロヴェニアにて開催された第9回国際サクソフォンコンクールにて女性として初めて優勝。コンクール創立以来初の快挙を成し遂げた。2018年「プロムナード」でCDデビュー。財団法人地域創造平成27・28年度公共ホール音楽活性化事業派遣アーティスト。くルミエ・サクソフォンカインドオーケストランメンバー。



『名手たちの強い味方Yamahaカスタム875EXのココがすごい!!

ここからは現在YAS-875EXを愛用しているトップ奏者たちの声を一挙にご紹介しよう。

ジャンルも世代も国境も越えた豪華顔ぶれの名手たちによる、YAS-875EXへの信頼がうかがえるコメントが集まった。(掲載は ABC順)

Q1. プロ奏者になろうと思ったきっかけは?/Q2. YAS-875EXを初めて吹いた際の印象と使おうと決めた理由は?/Q3. プロとしてのキャリアで YAS-875EX を使った印象的な仕事は?/Q4. YAS-875EXの気に入っている点は?/Q5. ヤマハの楽器の良さとは? 選んで良かったと思うことは?/Q6. YAS-875EXはどんな奏者にオススメしたい?

有村純親 Sumlchika Arimura (Quatuor B)



A1. 特別具体的なきっかけがあったわけではありませんが、中学生の頃から地元の一般吹奏楽団に入っていたり、ソロのコンクールで入賞していたりしたので、その頃から漠然とプロになりたいなあとは思っていました。

A2. 総じて「扱いやすく、使い勝手のよい楽器」。音色も自分好みだし、操作性も良く、吹き心地もちょうど良い。音程もいいし、値段もお手頃。国産のメーカーであるというのは、プロとしてやっている身としてはとても心強いですね。

A3. 特別 YAS-875EX だから! というエピソードはありませんが、楽器の選定の仕事の際に、特にこの楽器の生産ラインと検品者のクオリティーの高さに驚かされます。吹奏楽をやっている中高生に指導に行く時も、875EXの楽器で揃っているとなんか安心感がありますね。

A4. A2.と被ってしまいますが、明るく柔らかい音色ですかねえ。コンパクトな操作性も気に入っています。そして、楽器の構造上、音程を良くしようとすればするほど、鳴りむらや吹き心地に影響するはずなのに、全くそういうことを感じずに、音程良く演奏できるところ。

A5. これも他の質問の答えと被ってしまいますが、端的に言うと音色の柔らかさと扱いやすさでしょうか。あとは何気にヤマハの社員さんの開発や普及にかける情熱や人柄の良さのおかげで気持ちよく仕事させていただいています。

A6. まだ一度も試したことがない全ての奏者にオススメしたいです! また以前に試していても今の楽器に何か満足できていない人にも!

崔 師碩 Shishuo Cui (Saxophone Quintet "FIVE by FIVE")



A1. 本当は競馬選手になりたかったのですが、体重のラインに引っ掛かり、無理でした。その後テレビで見た小澤征爾さんが指揮されたコンサートに感動して、「自分も将来音楽をやっていきたい!|と思ったのが最初でした。

A2. 「めっちゃいい音じゃん!」と思いました。しばらく吹いていたら、自分がうまくコントロールできないフィンガリングや跳躍などがすごくやりやすく、YAS-875EXを使っていこうと決めました。

A3. 吹奏楽やオーケストラのエキストラに行った時、他の楽器とのアンサンブルがとてもやりやすくて、自分に余裕ができ、もっと音楽作りに集中することができるようになったことです。

A4. 音程や吹奏感はもちろんバッチリですが、やっぱり柔らかい音色はたまらないですね。高級なお肉を食べているような気持ちになります。それと自分の場合は指がとてもフィットしていて、フィンガリングがやりやすいです。

A5. アルトに限らず、他の楽器もコントロールしやすく、音色も良い。音がよくないと練習する気にならない僕には、かなり「吹きたい!」という気持ちにさせてくれるので、ヤマハを選んでよかったといつも思います。また62など、他のグレードの楽器の質もかなり高く、始めたての方でも難なく演奏することができます。

A6. 僕は自分の音色と指のコントロールにずっと悩んでいました。僕と同じ悩みを持っている奏者もいると思います。それを解消し、もっと自由で音楽に全集中したい奏者たちヘオススメしたいです。

アレックス・ハン Alex Han (米国ジャズ・プレイヤー)



A1. 両親や個人レッスンの先生、それから私を指導してくれたパキート・デリヴェラとジョー・ロヴァーノの勧めがあったからです。プロとして生きていくことで音楽を楽しんだり、音楽で生計を立てたりするだけでなく、世界を良くしたり、私の音楽を聴いてインスピレーションを得る手助けをしたりできる――そう気づいたことが、プロの道に進むきっかけになりました。

A2. ヤマハは9歳の時から使っていますが、他のどのブランドよりも安定していると思います。他のブランドも試しましたが、ヤマハに敵うものはありませんでした。職人技と細部までのこだわりは他のブランドにないものです。使用しているYAS-875EXとYSS-82Zには本当に満足しています。

A3. 2008年7月のマーカス・ミラー (グラミー賞受賞のベーシスト・プロデューサー) との最初のツアーが最も記憶に残る瞬間の一つです。 ヨーロッパ20都市のツアーで、計28度も飛行機に乗りました。まさに毎日飛び回っていたんです。 人生で初めて海外の大きなツアーを 経験でき、求められる演奏レベルの高さを肌で体感できた貴重な経験でした。

池上政人 Masato Ikegami (洗足学園音楽大学 客員教授、日本サクソフォーン協会副会長)



- A1. 音楽教師を目指して、音楽学校に入学。吹奏楽部の顧問になりたかった。在学中にキャトル・ロゾー・サクソフォン・アンサンブルに誘われて、気が付いたらプロの活動が始まっていた。
- **A2.** 最初の印象は高音域の通りの良さ。次にオクターブ跨ぎのレガートがとてもスムースな点が素晴らしいと感じた。それと音程の作りやすさで、ぶら下がらないでしっかりと支えてくれる。
- **A3.** ヤマハの企画で、全国の楽器店ディーラーや、リペアの方々の前でミニリサイタルや、製品説明のデモンストレーションをさせていただいたのは、貴重な経験となった。物凄い「圧」で興味深く、皆さんが聴いてくださったのを覚えている。
- **A4.** 音色は最終的にその人の音が出るのだが、ヤマハは、目指す音を確実に明確にさせる「何か」を持っていると感じる。最初から今もそれは変わらない。
- **A5.** 低音域から高音域まで統一された吹奏感が特徴的で、鳴り方にムラがない。オクターブ跨ぎのレガートが楽で、音楽の組み立てに 集中しやすい。
- **A6.** メカニック的には手があまり大きくない人。手が大きくなくても操作しやすい。この楽器は懐が深く、多くのジャンルをこなそうとしている人にも対応できる楽器だ。

井上麻子 Asako Inoue (大阪音楽大学 特任准教授)



A1. 「サックスが好き・吹奏楽が好き」という気持ちだけで音楽大学に進んだが、大学で室内楽や現代音楽など様々なジャンルの音楽に触れることで、どんどん「演奏すること」に興味を持つようになった。卒業後フランス留学を経て、その間に得た日本やフランスでの音楽仲間・先生方に助けられ、いつの間にか現在に至る、という感じ。

A2. YAS-875からの乗り換えだったが、875よりさらに低音の発音がスムーズになり、高音から低音までの音色の統一感・レスポンスの良さが魅力。自分のやりたい音楽を演奏することにだけ集中させてくれる。音色の理想として尊敬する先生方が皆さんヤマハだったというのも、大きな理由のひとつ。

A3. 2008年のジャン=イヴ・フルモー先生の来日コンサートでDUOやクインテット、サックスオーケストラで共演させていただいたこと。 高校の時から憧れ続けた師匠との共演は、緊張と共に至福の時間だった。

A4. 一番の魅力は、演奏者によってそれぞれ個性的な音色を作ることが出来ること。目を瞑って聞いても「これは〇〇先生の音色だ」と分かるほど、ヤマハプレイヤーはそれぞれ個性豊かな音色になっていると思う。

A5. 私は基本的に弦楽器を目指して音色作りをしているのだが、一つの楽器でも様々な音色の変化をつけられる反応の良さが素晴らしい。ヴィブラートや音程のコントロールもやりやすいので、表情豊かな音楽作りに集中することができる。

A6. ソリストとしても室内楽や吹奏楽で演奏するにしても、とても扱いやすく(音程も抜群)、全ての人にお薦めしたい。特に「自分の音色・自分の音楽」を大事にする人にはぴったりの楽器です。

小森伸二 Shinji Komori(アリオン・サクソフォン・カルテット)



A1. 高校に進学して吹奏楽部に入り、経験者ということで顧問の先生からも頼りにされ、その気になってしまい、音大進学を希望。大学の先輩であるルマリエ千春先輩がフランスに留学したのを追っかけてフランス留学。当初は希望の音楽院の受験に失敗したりして苦労したが、そのおかげで音楽家としてやっていく覚悟ができました。

A2. それまでどの楽器を吹いてもそれぞれ長所短所があり、それをコントロールしながら吹いている感覚があったが、YAS-875EXは何のストレスもなく自分の思った通りに音が出せる感覚。発売前から素晴らしい楽器だと分かっていたので、出たら買おうと思っていました(笑)。A3. 2003年に楽器を購入してすぐ、2004年に日演連に合格して名フィルとドビュッシーのラプソディーを共演させていただいたことや、2008年のフルモー先生のジャパン・ツアーに参加させてもらったこと。アリオンでの演奏も全てこの楽器でやっているので、数え切れません(笑)。

A4. やはり音色の美しさが一番の魅力。その利点のおかげでフレージングにおいて感情表現に理性のブレーキをかけることなく、全て注ぎ込むことが出来るのが、自分にとってとても気に入っている点です。

A5. ヤマハの楽器はどのグレード、さらに言うと他の楽器でも、とても柔らかい音色感を持っていると思います。アンサンブルをする上で それはとても大きなアドバンテージです。

A6. YAS-875EX はグレードの高いプロフェッショナル向けの楽器ですが、決して扱うのが苦しい楽器ではありません。初心者にとってもこれほど扱いやすい楽器で始められたら、スムーズに上達していけると思います。全ての人にとってオススメの楽器です。

國末貞仁 Sadahito Kunisue (Quatuor B、Saxofox、Trio YaS-375、Saxaccord、シュピール室内合奏団、BRASS EXCEED TOKYO)



A1. 小学6年生の頃、最初の師匠である西宇徹先生に須川展也先生の1stアルバム「ワンス・アポン・ア・タイム」のCDを紹介していただき、初めて聴いた瞬間からその音色の虜になり、僕も須川先生のようなサックス奏者になりたいと思ったのが、プロ奏者を目指すきっかけるま

A2. それまで使っていたYAS-875に比べて、よりレスポンスがよくなった印象を受けました。より軽やかで、キラキラした透明感のある音色が出せる楽器なので、自分の目指す「讃岐うどんのように艶とコシのある演奏」にピッタリの楽器だと感じました!

A3. 大学院を卒業したばかりの2004年に、ヤマハが主催する中国4都市 (天津、煙台、成都、広州)を巡るクリニック&コンサートツアーのお仕事をさせていただいたことは、とても大きな経験となりました。自分が小学校の頃から吹いていたヤマハの楽器のプロモーションをさせていただけることに幸せを感じました。

A4. 音の鳴りムラが少ないことと音程がいいことはヤマハの楽器の持つ大きな優位性だと思います。アンブシュアやシラブルをそこまで大きく変えなくてもいい音程で吹けるので、より音楽表現に没頭することができます。キィの配置や形状もより演奏しやすいように考え抜かれていて操作性は抜群です。

A5. ヤマハの楽器はなんと言っても品質がとても優れていることが良い点だと思います。以前、ヤマハの工場見学をさせていただいた時に、それぞれの工程ごとに職人さんたちがプロの仕事をされている姿を拝見し、より自分の楽器への愛着が湧きました。

A6. 反応がよく、そんなにパワーがなくても楽にいい音で響かせられるし、キィの配置や形状もコンパクトで操作しやすい楽器なので、身体が小さな奏者にも扱いやすいのではないかと思います。

齊藤健太 Kenta Saito (ブリッツ フィルハーモニックウインズ、Saxophone Quintet "FIVE by FIVE"、The Quartet "Oiseaux")



A1. 中学時代に須川展也先生のCD を聞いてとても感動したのが最初のきっかけです。その後一度はプロの道を諦めましたが、高校1年の頃に洗足学園のサクソフォン教員によるコンサート「サクスケルツェット」を聞き、「やっぱりこの世界に入りたい!」と思い、プロ奏者となることを決心しました。

A2. 木管的で温かみのある音色に1番惹かれました。特に低音域の響き方は他の楽器では得られない落ち着きがあり、これがこれからヤマハを使っていこうという決め手となりました。

A3. アルトをヤマハに変えて1年半ほどだった頃でしょうか、浜松でのリサイタルを聞いてくださった知人から「前まであった"あと一歩踏み込めない枷のようなもの"が無くなった!」と言っていただけたことです。以前よりもフリーに演奏出来ているのかな?と思えるようになりました。

A4. とにかく音色が気に入っています!前述したような温かい音色、特に低音域は深みのある音色をとても好みですが、反面ガツンと吹き込んだ時にもしっかり応えてくれる包容力も持ち合わせています!

A5. 音程の正確さ、音色の豊かさに1番惹かれています。特に低音域の響き方は独特のふくよかさを持っていて虜になっています!

A6. 温かみのある音色、木管的な音色、ややダークで落ち着いた音色を求める方には非常におすすめできる楽器なのではないかと思います。